
リトルウイングの非日常

桜椿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リトルウイングの非日常

【Zコード】

N4809W

【作者名】

桜椿

【あらすじ】

太陽王フハト（殴 カムハーンを倒し、フラー（殴 ワイナールの活躍によって、無事ナギサを生還させることが出来たリトルウイング。

そんな彼らの（非）日常とはいかに……

キャラクター崩壊が激しいため、キャラクターの崩壊が許せない方は今すぐブラウザバックしてください！！

キャラクター崩壊具合～シズル編（前書き）

あらすじの方、ちゃんと読んだかいー？（デユオ）

えーっと……（幽真）

- ・うぶでカナヅチだけど、大人な雰囲気でかつこよさがある原作シズルファンの方は、今すぐ電源ボタン連打してください。
- ・ここにいるシズルは、究極の変態で面影が容姿と頭の良さしか塵並にないから。

まあ、腹くくつたやつだけ続きを読みな。（幽真）

キャラクター崩壊具合～シズル編

リゾート型ロッキー、クラッシュ。そして、Iのクラッシュを本拠地に置く軍事会社リトルウイング。今日も、平和な一日が始まった……

*

「ハーフすーおせよーー」（H//コア）

「ああ……、H//コア……」（悠莉）

「悠莉ー…ビウしたのー…なんか暗いけどーー」（H//コア）

「こや、なんか身体が重くて……」（悠莉）

「重いって……。朝から何ひとつ動き出せないーー」（H//コア）

「ぐわーーー」（シズル）

H//コアの飛び蹴りがクリーンヒット。

「あんた、バカ！？何朝っぱらから悠莉に抱き着いてる上にセクハラしちゃんのよーー」（H//コア）

「セクハラではない、体調チックを……」（シズル）

「抱き着いてる上に、ヤラシイとこ触つておこしてよく聞かねーー変態セクハラ魔どし確信犯ストーカーがーー」（H//コア）

「誰がストーカーだ！！」（シズル）

「ストーカーだけ否定すんかい！！他は否定しないの！？」（エミリア）

「他は言われ過ぎて慣れた。」（シズル）

「慣れかよ！－慣れるものなの！？」（エミリア）

「悠莉、朝から大変だな……」（ナギサ）

「大丈夫だ。慣れたから……」（悠莉）

「そこは慣れたって、言っちゃダメエエエー－－」（エミリア）

キャラクター崩壊具合～シズル編（後書き）

えーっと、私の中で、一番崩壊が激しいキャラ。シズルの崩壊具合はこんな感じです(ーーーー)

キャラクター崩壊具合～ヒューガ編（前書き）

はーい。IJの話は、GRM社の若手社長ヒューガが題材だよー（デュオ）

うーん……。ヒューガもキャラ崩壊があるが、どうやらかと言つと報われない……（幽真）

キャラ崩壊一割に対し、報われないがハ割だもんねー（デュオ）

ああ……。まあ、これも腹くくつたやつだけ続きを読みな。（幽真）

キャラクター崩壊具合～ヒューガ編

「…んにちは、悠莉さん。」（ヒューガ）

「ん？ ヒューガか？」（悠莉）

「はい。今日も相変わらずお美しさ……。水の精、セイレンが実在したとなれば、あなたのような美しさかもしませんね。」（ヒューガ）

（水の精ついで……、私の髪と田が青いからか？）（悠莉）

「悠莉さん、よろしければこれから一緒にお茶でもどうですか？」（ヒューガ）

「それは……」（悠莉）

「悠莉、クラウチさんが呼んでるだ？」（シズル）

「え？ クラウチが？」（悠莉）

「……あの、いつからいたんですか……」（ヒューガ）

「僕はつこさつきましたが？ 悠莉、行こう。」（シズル）

悠莉の腰に手を回す

「えつー？ あ、ああ……」（悠莉）

「……。ホントに、いつからいたのでしょうか……。とにかく、急

に現れたような気が……」（ヒューガ）

キャラクター崩壊具合～ヒューガ編（後書き）

基本、ヒューガは報われない（^o^）

キャストって、キスより先にいけないような気がする。構造的に考えて。（前書き）

段々、前書きのネタも切れてきたよね（デュオ）

それ言つちやダメだろトコオ……（幽真）

キャストって、キスより先にいけないよな気がする。構造的に考えて。

「悠莉……」（シズル）

「えつ、シズ……」（悠莉）

「イチャついてねえで仕事しろオオオオー！」（クラウチ）
ナックルでシズルをぶつ飛ばす。

「すまない、クラウチ。私からも人前ではやめないと言つてこらのだが……」（悠莉）

「だつたら、もつと口すつぱく言つておけ。じゃなくて！ アイツと
イチャつくなやめりつて言つてんだ！」（クラウチ）

「お父さんハ、アンナ変態ト付き合ひハ許しまセーン……」（キ
ルシー）

「誰もそつ言つてねえだろ……」（クラウチ）

「誰もあなたのことだと言つてなこわよ。」（ウルスラ）

「N I W B A W K U W W W」（トコオ）

「うぬせーーーーーか、なんでガーディアンズのお前がいるんだよ
！……」（クラウチ）

「いやー、ヒマだったからー」「（トコオ）

「総合調査部がヒマになるわけねえだろ！…」（クラウチ）

「シャツチョサン、悠莉とシズルがまたラブラブシテルヨー」（ チェルシー）

「いい加減にしろボンボンがアアアア…！」（クラウチ）

「ラブラブと言つより、セクハラにしか見えないが……」（幽真）

「捕まえる？」（デュオ）

「それが仕事だろ？」（幽真）

「でも、本人嫌がつてなさそりなんだよなあ……」（デュオ）

キャストって、キスより先にいけないような気がする。構造的に考えて。（後書き）

クラウチ（お父さん）は悠莉（娘）が心配で仕方がないようです（
^q^）

盗撮、盗聴、ストーカーを気付けないようになっている人はスパイになれると思う

キャラクター紹介始まるよー（デュオ）

とうとうネタを切らしたな。作者……（幽真）

悠莉・インヴェナー

女性キヤストのレンジャー。リトルウイング所属の傭兵。記憶喪失
だったがダメー（殴）ミニリアとの出会いによって記憶を取り戻し、
世界を救う。シズルとの交際はこの頃から。どれだけセクハラ被害
に会つても、あまり怒らない鈍さがある。

『盗撮、盗聴、ストーカーを気付けないよう出来るのはスパイになれると想つ

『シズル? 何してるんだ?』 (ゴート)

『写真や。見るか?』 (シズル)

『おう! ん? ノーリがこいつぱい』 (ゴート)

『ああ、僕が撮らうとするとタイミングよくへつて来ちゃうからな。それだけだ。』 (シズル)

*

「で、その一枚をもらつたぞ!..」 (ゴート)

「これって.....。どう見ても盗撮じゃん!! 入つてくれるレベルじゃないよ!..! 完璧狙つているじやん!..」 (ヒリコア)

「どうせつけてなんだ?」 (ゴート)

「勝手にそのヒトの写真を撮る」と。こわば犯罪。悪いことよ!..

(ヒリコア)

「悪いこと。シズル、悪いことしてるのがー。」 (ゴート)

「やつよー。やつをとひりこめに行くわよー。」 (ヒリコア)

*

「お前は完璧に包囲されてるー。今すぐその首をへさげなさい。

」（デュオ）

「包囲って……」（シズル）

シズルの周りに、ヒミコア、コート、ナギサ、デュオ、幽真が囲つ
ている。

「あんた、何盗撮してんのよ！？」（ヒミコア）

「別に、盗撮など……」（シズル）

「いや、証拠あるから。」（デュオ）

悠莉が映ってる写真を出す。

「コート！？アレは一人だけの秘密だろ！？」（シズル）

「自爆したwwwwww」（ヒミコア）

「えつ？」（シズル）

「ざ～んね～ん コレは、悠莉に協力して撮ったものだよー」「
デュオ）

「謀つたな！？」（シズル）

「あんたが盗撮なんかしてるからでしょ！？」（ヒミコア）

「今ので完璧に罪状になつたねー 悠莉ー！来てーー」（デュオ）

「ええ！？」（シズル）

「……」（悠莉）

（「うれたなあ。完璧に……）（H//コア）

「盗撮は……。欲求不満によつて行つ行動の一つだと聞く。その……。なんか、不満があれば言つてくれても良かつたのだが……」（悠莉）

「えつー?」（全顔）

「……」（悠莉）

「……、すまない。悠莉……」（シズル）

「ちよつとー?なんで盗撮許しちやうのよー?」（H//コア）

小声。

「知らないし。恋は恋つて、正にこの事だねー……」（トコオ）

小声。

盗撮、盗聴、ストーカーを気付けないようになると出来るのはスパイになれると思う

悠莉のこれは、「鈍い」という言葉で収まるのだろうか……

無いより着痩せの方が悲しいと思う（前書き）

次は、俺たちの紹介だよー（デュオ）

幽真^{ユウマ}・イングラム

男性ヒューマンのブレイバー。元々はガーディアンズだつたが、リトルウイングに入社する。ビーストクオーターのため、半ナノブラストが可能。ボケが一人もいるため、基本ツツコミ役。

デュオエル・スイスル

男性ヒューマンのブレイバー。ガーディアンズの総合調査部所属。純粹なヒューマンで、ヒューデイズ出身。シズルとは従兄弟。腹黒ドＳな性格。故意で行うのもしばしば。

無じよ着瘦せの方が悲しこと思つ

「うーん……」(H//コトア)

「どひしたのだ? H//コトア……」(ナギサ)

「ハア……」(H//コトア)
ナギサを見て溜め息をつく。

「……?」(ナギサ)

「ナギサもあるし……。悠莉もなあ……」(H//コトア)

「どひしたの? H//コトア。」(ル//リ)

「悠莉とナギサが巨乳で羨ましこじ」と。(H//コトア)

「えつー? 悠莉がー? リゾート地区の時は私たちより(ル//リ)

「シャワールームだが……」(悠莉)

「御一緒しても良いですか?」(ル//リ)

「ああ。構わないわ。」(悠莉)

(確かめてやる……! 確かめてやるわー) (ル//リ)

*

「……」（ルミア）

脱衣所で服を脱ぎながら、悠莉をじらみます。

（しかし、年下のルミアに負けるだなんて……）（ルミア）
自分の胸を見て絶望する。

「うひ、悠莉はやつ……」（ルミア）

悠莉がいないことに気付き、直ぐ様脱いでシャワールームに入る。

「あ、悠莉！……」（ルミア）

悠莉の裸体を見て絶句する

「ん？どうした？」（悠莉）

「な、な、な……」（ルミア）

「な？」（悠莉）

「なんで…？キャストも着痩せするの…？」（ルミア）

「え、着痩せ？」（悠莉）

「……、失礼します…」（ルミア）

「ちよ、ルミア…。わやあー」（悠莉）

「うひ、手に余る程の质量……。キャストだから、仕方ないかもし
れないけど……」（ルミア）

「ル、ルミア…あまり、揉むなー」（悠莉）

「うひ、 なんでキャストも着痩せするのよ……」（ルミア）

「ルミア、 いい加減に……」（悠莉）

「見た目が一六歳くらいで、 これだなんて……」（ルミア）

*

「わかった？ 悠莉が着痩せだった」と。（ヒコア）

「うん……。ナギサほどボリュームがあるわけではないけど、 大きかつた……」（ルミア）

「まあ、 ナギサにボリュームで負けた」とせづいてみたいたけど……」（ヒコア）

「せづいえば、 悠莉の歳は……」（ルミア）

「えつと、 もう一十歳のハズ……」（ヒコア）

「一十歳なのに、 一六歳の姿……。違反してるわー」（ルミア）

「悠莉も見た目が幼い」と、 背が低いこと気にしているナビが……」（ヒリア）

「変えないの？」（ルミア）

「本人は一十代にしてくれ。 つて言つてゐるナビ、 シズルが許さないからもある……。 あいつを無視してやがつとするが、 かなりうるさい

「…………」（H//コト）

「本物だ、変態なのね……」（ル//ト）

「今更だつづーの。あの変態セクハラ魔道士確信犯ストーカーことつては、セクハラとストーカーが口課だもん。」（H//コト）

「止めなごのー?」（ル//ト）

「あいつ、無駄に強こから止められないしー出来の悪いやつらいだもんー。」（ル//コト）

「こんな時に不便ね。悠莉と互角なのが…………」（ル//ト）

「うそ…………」（ル//コト）

「悠莉って、彼のビジが良かつたんだろ?…………」（ル//ト）

「あれは嘘だ。今となつてはね…………」（H//コト）

無いより着痩せの方が悲しいと思つ（後書き）

悠莉は着痩せをする話。事実、ゲームでレギュラースイムを着せたら、レウスイノセントと比べた結果、着痩せした。orz

PS3のローゼンショベルトでも着痩せするんだよなあ……

キャストもキャストなりに詠みせある。（前轍れ）

#すべ、したつむつ……（一・一・・・）

キャストもキャストなりに幽みはある。

「悠莉、いるか?」（シズル）

悠莉の自室前。

「ん? どうかしたか?」（悠莉）

「いや、少しな。」（シズル）

「……?」（悠莉）
シズルを自室に入れる。

「どうかしたのか?」（悠莉）

「特に何も。」（シズル）

座っている悠莉を背後から抱き締める。

「ん?」（悠莉）

少し首をひねつてシズルの表情を伺つ。

「二人つきりだと、怒らないんだな。」（シズル）

「人前だと、恥ずかしい……」（悠莉）

「そうか? 僕はあまり気にならないが……」（シズル）

「恥ずかしいだろ。こんな密着した状態で……」（悠莉）

「そうか?」（シズル）

悠莉の太股を撫で始める。

「んっ……」（悠莉）

少し身体を震わす

「かわいい。本当に……」（シズル）

耳元で囁く

「う……」（悠莉）

「まあ、こんな姿を他人に見せられたくないよな。僕自身、こんな色っぽい悠莉を他の男に見せたくない……」（シズル）
両手が腰から脇腹辺り向かって撫でる

「あ、ハア……」（悠莉）

「でも、君はキャストだからな……」（シズル）

悠莉の胸の下で腕を組む。

「すまない、いつも……」（悠莉）

「いいんだ。むしろ、君がキャストだからじゃ、まだいいっていられる……」（シズル）

悠莉の瞼に唇を当てる。

「う……」（悠莉）

シズルが唇を離すと、悠莉から唇をシズルの唇に重ねる。

「……、珍しいな。」（シズル）

唇が離れてから、優しく微笑む。

「「うるせー……」」（悠莉）

少し顔を俯かせる。

「御主人様、只今戻りましたつて……、何しどんじや己はア……」

（ステラ）

悠莉の部屋に入った途端に、シズルと悠莉の状態を見て、銃を構える。

「おつと。ここのどんなもの撃つていいいのか？」（シズル）

悠莉から離れる。

「だつたら表出る一ミンチにしてやりやー」（ステラ）

「パートナーマシナリーが、そんな口調で良いのか？」（シズル）

「るせーーーテメヒのせいだらー」（ステラ）

「はいはい。それじゃ。」（シズル）

悠莉の部屋を出る。

「御主人様、あんな変態セクハラ魔ドウ確信犯ストーカーを、今すぐ抹殺しますからねーーー」（ステラ）

ステラも部屋を出る。

「……」（悠莉）

一人茫然とする。

（生身の身体なら、あんなに我慢せるととは無いんだけどな……）

（悠莉）

机に突っ伏して、心の中で小さく呟いた。

キャストもキャストなりに悩みはある。（後書き）

ステラは御主人様に害なす奴には容赦ないです（^_^）

アラスカ州、シエタカマハルコハラヌウトナムニシニサセ。 (繪畫也)

チビ化してみた(<σ>)

ナリタヒ、シタコソロココノヒトはおこしにもの。

「んにちは。」んばんはか、おはようかもしけないが、とりあえず
こんにちは。青髪ツインテールキャス娘こと、悠莉・インヴンナー
だ。

今、私の田の前には非常に大変なことが起きた。それは何かつて?
ヒリア、コート、ルミア、ナギサの四人の身体がちぢめやくなつ
たんだ……

事の始まりは、数分前……

*

『ヒリア、何をしているんだ?』（悠莉）

『いやあ……。ちょっと、ガーディアンズに頼まれてわ……』（ヒ
ミコア）

『だからヒミアもいるのか。』（悠莉）

『ええ。ヒリアが余計なことしなつよつと見張るより頼まれてい
るから。』（ルミア）

『それ、余計な一言なんですかび……』（ヒリア）

『事実でしょ?』（ルミア）

『ヒリア、ヒリア!—何をしているんだ!?』（コート）

『あ、ゴート！走り回るなー。』（ヒミコア）

『悠莉、クラウチが呼んでこらね。』（ナギサ）

『ああっ！…』（ヒミコア）

ガタッ！…ボチャつ、ドガアアアアン！…！…

ゴートが走り回ったことにより、薬品が入ってる瓶やら箱やらが倒れて、エミリアが調整していた薬品に混ざり、小さな爆発が起きた。

『ケホッ、ケホッ……。大丈夫か！？』（悠莉）

密室の中には煙がもうもうとしているが、換気扇が回っていたため煙が次第に晴れしていく。

『ちょっとーーーとーだからはしづちやダメつていったじやない！…』（ヒミコア？）

『「」、「」めんなさーーー。』（ゴート？）

『なんか、してんがひくいのだが……』（ナギサ？）

『そうですね……』（ルミア？）

『……』（悠莉）

煙が晴れた先には、ヒミコア、ゴート、ナギサ、ルミアとおぼしき子供が四人いた……

*

そして、現在に戻る。

「じゃあ、あたしたち、ひかえめくなつひさつたの?」（えみりあ）

「まあ、な……」（悠莉）

「からだがちこわくなつたせいで、らくが……」（なみれい）

「待つてろ。今、ウルスラとチャーレルシーを呼ぶから……」（悠莉）
通信機を操作する。

数分後

「これはまた……」（ウルスラ）

「あつあつになつたヒミコアたち、スッゴクキュートネー……」（チャーレルシー）

「一番の問題は服ね……。これなんかどうかしら?」（ウルスラ）
幼稚園児の服を取り出す。

「それれるーーー!」（えみりあ）

「せぐわーーー!」（ゆーじ）

「いいのか、それで……」（悠莉）

*

そして幼稚園児の服を着た、えみりあ、ゆーと、なれい、るみあ
が完成した。

「ホントにベリーキュートネ……」（チャールシー）

「ちゃんと戻れるのか？」（悠莉）

「そこは検査しないとね……」（ウルスラ）

「何とも言えないか……」（悠莉）

「こちおー、ちょーじーしたくすりは、ぜんぶこいつかがみじかいや
つだよ~。」（えみりあ）

「だからついて、ほつといても大丈夫じゃないような気が……」（悠
莉）

「とりあえず、検査しましょ~。HIIコアたち、着いてきなさい。
(ウルスラ)

「はーい。」（えみりあ、ゆーと、なれい、るみあ）

*

「HIIリアたち、大丈夫だらうか……」（悠莉）

「ソウイエバ、悠莉は平氣ナノネ。」（チャールシー）

「どうやら、キャストには効果は無こよつだ。」（悠莉）

「……」（ウルスラ）

検査室から、ヒミリア達を連れて出ていく。

「ドゥ？ウル……」（チヒルシー）

「あんまり芳しく無いわ……。ヒミリアが調合していた薬品や、元々作ろうとしていた薬品から調べないと……。でも、身体が小さくなつた意外は、身体的影響は無いわ。」（ウルスラ）

「原因がわかるまで、ヒミリア達はどうする？」（悠莉）

「私やチエルシーは原因を探るから、あなたが面倒を見て頂戴。これ、決定事項。」（ウルスラ）

「わ、わかった……」（悠莉）

「一人がタイヘンなら、誰かにお手伝い頼んだラ？」（チヒルシー）

「スケットはもう呼んだわ。そろそろ来るわね……」（ウルスラ）

「……」（シズル）

「えつ…？シズル！？」（悠莉）

「しずるー…かたぐるまーー」（ゆーと）

「大体の事情はウルスラさんから聞いている。原因がわかるまで、僕たちが面倒を見るんだろう？」（シズル）

「あ、ああ……」（悠莉）

「後はヨロシクネー」（チャエルシー）

チハセリハ、シラタガヘヒロココノシテハシテハシメニシム。 (後編)

ちょっとしたシリーズものにしたいと思ひます。
書いて欲しい話を募集します m(—) m

子供の仕事は、よく遊びとくらべるといふ。(前略)

チビ化シリーズ開始(^-^)

子供の仕事は、よく遊びよへ寝る」といふ。

「さて。任せられたものの……。どうすればいいのだろうか……」（シズル）

「なんか、したいこともある?」（悠利）
えみりあ達に、視点が合うようじやがむ。

「うーん……」(えみりあ)

「あそびたいぞーーー。」(オーバー)

「 なあや 」
からだはいじかしたい。

（悠莉）あいつでせこよいか？」

はい!!」(えみりあ)と、なむむるみあ)

私が鬼になるから
みんな逃げる準備はいい(?)

卷之三

「えみりあ」（えみりあ）はつかまらないわよ

「ナーフ、せじぬー。」（悠莉）

八方に走り出す。

「おはようございます」(ハニツル)

「まへーーー。」（悠莉）

「……」（シズル）
僕は思わず驚愕した。悠莉が、あんな小さい子の面倒を見るのが得意だなんて……。現にあの鬼（ひ）も、わざと彼女は加減している……

「それー。」（悠莉）

「べーーー。わざねんでしたーーー。」（えみりあ）

「今度はちゃんとつかまえるわーーー。」（悠莉）

子供に翻弄されながらも、彼女はとても楽しそうだ。そういうえば、保育士の資格を取ったとか言っていたな……

「つかまえたー。」（悠莉）

「わわわーーー。」「やーーー。」（ゆーと）

「わわわーーー。」「おーーーーーー。」（えみりあ）

子供と戯れる悠莉が、何とも可愛らしく。あんな笑顔、ほととぎ見たことが無いからな……

「……」（なめられ）

ん？ナギサが僕の足を触つてこむが、どうしたんだ？

「しずるがおにだぞーーー！」（ゆーと）

「アリーナがハントー...」(えみつ)

どうやら、僕が鬼のようだ。仕方なく僕はエミリア達を追い掛けることにした。しかし、エミリア達は非常にすばしっこい。つかまえようとすると、すぐ逃げられる。

「おめでたさんだね——。」(アーニ)

「いがいとどうこのねーーー。」(えみりあ)

本音を言えば、屈みながら走るのは少しキツイ。こんな時に自分の身長が憎たらしく思つ。

「でも、もうひとつかねてきた……」（ぬみあ）

ルミアが欠伸をした途端、他のエニリアやコート、ナギサまでもが欠伸をして眠そうだった。

「やれやれ、少し疲れちやつたか。」（悠莉）

悠莉が、エミリアとコートを抱き抱えた。さすがにもう一人も持たせるわけにはいかないから、ルミアとナギサは僕が持つことにした。

僕達が向かったのは、悠莉のマイルームだつた。行く途中で、四人とも眠つていた。そして、悠莉は四人を自分のベッドに寝かせた。

*

「なんだらうな……。『親』といつのは、こんな感じだらうか……」

(悠莉)

「さうだな。君は保育士と言つより、母親に近かつたな。」(シズル)

もし、彼女が子供を産んだりこんな感じなんだらうな……

「母親、か……。まあ、そんなのには永遠になれないと思つがな……」(悠莉)

寂しそうに咳いている割には、眠っているH/M/LIA達の頭を撫でる仕草は、とても優しい手付きだった。

「母親になれなくとも、妻にする」となり出来るぞ~。(シズル)

「さうだな……」(悠莉)

すると、一瞬間が空いた。

「悠莉?」(シズル)

「な、な、な……一何言い出すんだバカ~~~~!」(悠莉)

「えつ~」(シズル)

「妻にあるつて、意味をわかつて言つてこのか~~~~!」(悠莉)

「さすがに、その意味はわかつてこゐるだ。」(シズル)

「……」（悠莉）

この会話を全く別の人物が盗み聞きされていたことを、二人は知らない。

子供の仕事は、よく遊びよく寝るじゃ。 (後輩)

バカップル…… (ヒュオ)

つか、なんで俺たちがあいつらの行動を記録しないといけないんだよ…… (シグレ)

ノートに今日の行動をまとめる

仕方ないだろ……。頼んだ相手が相手だし…… (ヴァイスライド)
盗み聞きから戻つてくる

俺たちみんな、 チェルシーに脅されたってことだよな…… (幽真)

…… (全員)

肉体よりもか、精神も幼稚化したようです。（前書き）

チビ化が深刻な状態になりました（^ ^ q ^ ）

肉体が、精神も幼稚化したようだ。

ん

わん

おかあれど……

おかれー・おかあれどー・

「うへ、え……」（悠莉）
ふりふりと皿を覚ます。

「おせよー・おかあれどー・」（ぱみつあ）

「おねぼーさんだわーー・」（わーと）

「おなかすいた……」（なめくわ）

「ああ、「じめんね。」じめん、あべ作るかい……」（悠莉）
その瞬間、悠莉の中に何かが引っ掛けた。

「おかあれど……？」（悠莉）

「あ、起きたか。」（シズル）
悠莉のマイルームに入つてくる。

「おひめーんー・」（ぬああ）

「お、おとうさん…？」（シズル）

ただひたすら、悠莉とシズルは驚愕した。

*

「ちちちゃんになつた」とは聞いていたが、まさか本格的に幼児退行するとはな……」（クラウチ）

「ああ……。私たちを親だと思い込んでいるよつだ……」（悠莉）現に、悠莉の周りに幼稚園児×4が群れている。

「まあ、お前を母親と思い込むのはいいが。なんであいつが父親と思いつ込まれているんだよー！」（クラウチ）クラウチが納得していなのは、シズルが父親と思い込まれていてこじるだつた。

「やう言われましても……」（シズル）

「おとうさんをいじめるなーーー」（ゆーと）

「いじめるなーーー」（えみりあ）

シズルの前に四人が立ち始める。

「いじめてねえよーーーたく、調子狂うなーーー。とりあえず、調査に回つてるウルスラたちに連絡入れとくぜ。」（クラウチ）

「ああ、頼む。」（悠莉）

「おかあさん、おはなしあわり？」（ぬみあ）

「うん。終わりだよ。」（悠莉）

「だったらあそぼーーかくれんぼーー」(ゆーひ)

「はいはい。」（悠莉）

幼稚園児に囲まれながら移動。

「母親が板についてるな……」（クラウチ）

「そう、ですね……」（シズル）

「……？ オイ、どうした？」（クラウチ）

「心配してくれるんですか？」（シズル）

「あ、ちがえよー。」(カラウチ)

「彼女は、母親になんか永遠になれないって、気にしていました。」

「あいつ、まだ気にしてるのか……。血が繋がってなくとも、俺たちは『家族』と言える間柄なのによ……（クラウチ）

「血の繋がり、か……」（シズル）

「確かにあいつはキャスト。子供は産めない身体だ。でも、今まで紡いできた絆は、種族なんて関係ないだろ……」（クラウチ）

「……」（シズル）

「あー！だからって、付き合っては許せねえぞー」（クラウチ）

「どうなんですか……」（シズル）

「ぬせーー俺は認めないぞー」（クラウチ）

「おとうせーんーーおかあさんがみつからなこよーーー」（ぬみあ）
涙目で駆けてくる。

「ええー？」（シズル）

「おかあさん、すぐみつかるからいまくかくれてよね。つていつた
らみつからなくなっちゃったーーー」（えみりあ）

泣き出す。

「わ、わかった！大丈夫、お母さんはすぐ見つけるよ。」（シズル）
なれないながらも、優しく微笑む。

「ほんとー？」（えみりあ）

「ああ。見つかるまでは、あのおじさんと遊んでおこづ。」（シズ
ル）

クラウチの方を見る。

「はーいーーー」（えみりあ、ゆーと、ぬみあ、なぎわ）

「よし、いいんだ。」（シズル）
走り出す。

「おひやーんーーなこしてあそぶのーー？」（えみりあ）

「あやぶのーー?」（ゆーと）

「うーん、 そだなあ……。 よし、 スパイじゅじだー」（クラウチ）

「すぱじゅじゅ?」（なぎわ）

「お前ら、 父さんに気付かれなにように着こなべんだ。」（クラウチ）

「はーい!!」（えみりあ、 ゆーと、 るみあ、 なぎわ）

「元気が良いのはいいが、 スパイは気付かれなによつにしないことダメだぞ? 小さい声でな。」（クラウチ）

「はーい。」（えみりあ、 ゆーと、 るみあ、 なぎわ）

*

シズルは、 迷いもなくトラスに向かった。 こんな時に彼女が隠れそうな場所は一つしかない……

「悠莉……」（シズル）

「シズルか、 すまない……」（悠莉）

「ヒーリアたちが泣きながら探していたぞ?」（シズル）

「ああ……、 すまない……」（悠莉）

「まだ気にしてこのか？自分が本当の親じゃなことね。」（シズル）

悠莉の隣に立つ。

「親がいない悲しさを、もう一度味わせるわけにはいかないからな……」（悠莉）

「やつぱつ、優しいんだな……」（シズル）

「えつ？」（悠莉）

「悲しませたくないなら、僕たちがちゃんと務めを果たすべきだ。ただ、それだけじゃないか……」（シズル）

悠莉を優しく抱き締める。

「すまない。弱気になっていたな……」（悠莉）

「親になるところのは、大体そつだらけ。」（シズル）

「そつかもしれないな……」（悠莉）

一人は互いに微笑んだ。

*

「ひふらぶだあ～」（えみりあ）

「えみりあ、しー。だよ。しー。」（ぬみあ）

「おとづせるとおかあさん、なかよしなかよしー」（ゆーと）

「 オー ヒ、 レー。 」 (なぎや)

と、観察する幼稚園児×4がいた。

肉体がいか、精神も幼稚化したようです。（後書き）

「 もう、申し訳ないとしかいえねえよ…… 」（シグレ）

「 はあ…… 」（ヴァイスライド）

「 ダメだ。あのラブリーブーリにやられても。 」（ティコオ）

「 悠莉とシズルがバカップルなのは、もうあきらメロンの領域だぞ。 」（幽真）

*

「 ミンナ、壊れかけているよつねー…… 」（チヨルシー）

「 当たり前でしょ。あんな甘ったぬこのをずっと記録せたら、彼らが参っちゃうわ。 」（ウルスラ）

子供も大人も、共通の敵は黒く光る触覚があるアレ（前書き）

オンドウル侍さんの、仮面ライダー「ゴンナイト 翼を抱いた鏡」の戦士に登場するアレンとリイマジレンが登場します（^__^）

余談ですが、このネタが出来る前口に、風呂入ってる時に出現したのでやりました（^o^）

子供も大人も、共通の敵は黒く光る触覚があるアレ

「へ、へんな……」(たゞやめ)

後退りをする。

「へんなああーー。」(なぞれ)

バノン・ヌイミを強く抱き締め、力の限り叫ぶ。

「エーフた？ あんな？ 一（アーハ）

「みんな、どうしたの？って……」（悠莉）

女性陣はみな硬直した。なぜなら……

彼女たちの前に、黒く光る触覚があるアレ。Gがいたのである。

「おかあさん! アレなんだー?」 (ゆーと)

「近付いちやダメえええええ…」（悠莉）

「おかあせーん……」（えみりあ）

涙目で見上げる。

「おかげーん……」(ぬみあ)
涙目で見上げる。

「いのん、アレだけは……」（悠莉）
身体をガクガクと震わせてくる。

「どうしたんだ？悠莉……」（アレン）

「アレンー、それにレンも……」（悠莉）

「な、なんで泣きやうなんだ！？」（アレン）

「アレを見て何とも思わないのかー？」（悠莉）
Gに指をあやす。

「落ち着け。たかが害虫だな。」（コイマジレン）
カードを構える。

「レン？」（アレン）

「KAMEN RIDER!!」（コイマジレン）

「くそしぃした……」（アレン）

「かっこいい……」（パオロ）

「かわいい……」（アレン）

「FINAL」（コイマジレン）

「落ち着けえええええ……アンタが落ち着けえええええ……」（アレン）

レンを取り抑える。

*

「つ、早く去つてくれ……」（悠莉）
幼稚園兜×4を守るよひに腕を回す。

「全くだ。」（コイマジレン）
変身を解く。

「ホント、早く去つてくれないかな……」（アレン）
レンの暴走を取り抑えてたため、全身ボロボロ。

Gはまだ、廊下を力サカサと右往左往していた。

「ぼく、あこつやつしかね……」（ゆーじ）
悠莉の腕からすり抜けた。

「あつー・ゴーテーーー」（悠莉）

「ぐぬい……」（ゆーじ）

Gの前に立つ。

Gは触覚を動かす。

「むいり……」（ゆーじ）

Gが翼を広げる。

「つー・?」（ゆーじ）

Gは宙に羽ばたく。

「うわああああああーー。」(アーッ)
逃げ出す。

逃げ出す。

「Gが、ヤツが飛んだだとオ！？」（リイマジレン）

「だからって、カード構えるなあああああ！」（アレン）

「なんだ、この騒ぎは……」（シズル）

「シ、シズル！！」（悠莉）

「おとハセーん！」（幼稚園児×4）

とおじがんばる（シバリ）

「.....」（シズル）

「お、おー……」(アレン)

「……」（シズル）

「さ、刺した……」（アレン）

地に降りたGに近付き、グレンを突き刺す。

「後で洗浄しないとな……」（シズル）
グレンをナノトランスでしまつ。

「おとうさん……」（幼稚園児×4）
シズルに群がる。

「すまない、助かった……」（悠莉）

「ふふ、女性らしくてかわいいよ。」（シズル）

「……／＼／＼」（悠莉）

「俺たち、舐れられてる…………？」（アレン）

「お父さんとお母さんって…………」（コイマジレン）

「え？ 今更ツッ」「//^.」（アレン）

後日、ステラが一人でG殲滅作戦を遂行しましたとか。

子供も大人も、共通の敵は黒く光る触覚があるアレ（後書き）

「あいつら、イチャつくるのが日課なのか？」（シグレ）

「……」（ガアイスライド）

「Gの討伐かあ……」（トコオ）

「ステラ、お疲れ様。そして、オンドウル侍さん。アレンとリライマジレンがあんな事になつて申し訳ありませんでした。」（幽真）

遊園地は、なんやかんやで大人が一番楽しんでいるような気がする（前書き）

とうとうチビ達が外出します（・・・）

遊園地は、なんやかんやで大人が一番楽しんでいるような気がする

『おれんちこわたい……』（えみりあ）

『いきたい！』（ゆーと）

『え？ 遊園地？』（悠莉）

『うん！』（えみりあ）

『じえ』と一緒にすたーとのりたい!!』(ホーリ)

わたしはかんらんしゃ!!』(るみあ)

（たわわ） たわわ たわわ たわわ たわわ たわわ たわわ たわわ たわわ

お父さんにお願いしてみよが
（懇末）

おれかいづる――(六三)お

*

そして、子供達の要望に答え、遊園地。

「わーい！」（えみつね）

「ゴート、エミリア！ 勝手に行っちゃダメ！」（悠莉）

「えおつねーかーとーぬー...」(ぬおぬ)

「.....」(後編)

「半分は大人しくて、本当に助かる……」（シズル）

「まあ、な……」（悠莉）

「じゃあ、一回やったーすたー……じゃあ、一回やったー……」（空ー）

「ひーかつぶいきたいー！！」（えみりあ）

一はいはい順番、順番。」（悠莉）

*

「『めんねー、ぼく。ジヒツトコースターは、このバーより小さい子は乗れないんだ。』（スタッフA）

ゆーとの身長が、田安バーに届いていない。ちなみに。田安バーは163cmの悠莉と比べると、ちょうど胸辺り。また、ゆーとの身長は悠莉の膝辺りしか無い。

「えーーー？ やだやだやだーーー」（ゆーと）

「悠莉、ハートー。」

駄々をこねるコートを立たせる。

「『ジルヒル』すたーのつたー……」（ゆーと）

「じゃあ、大概へなつたら乗れりつか。」（悠莉）

「ほんとーー。」（ゆーと）

「ハズ。」（悠莉）

「やくやくだねーー。」（ゆーと）

「ハズ。約束あるよ。」（悠莉）
指切りをつく。

*

「ルーフーかっぷーーー。」（えみつあ）

「あんまつ回転よ。」（シズル）

「よせ。HIIコアのルーフー。」（悠莉）
そして、ルーフーが動き出す。

「ルーフーーー。」（えみつあ）

「ハズ。」（シズル）

「ハズ。」（悠莉）

「めが、めがまわるーーー。」（ゆーと）

「あやああああーー」（ぬみあ）

「う……」（なめや）

パノンヌイミが飛ばされないよつて、強く抱き締める。

そして、一人の女の子の笑い声と一人の子供の悲鳴が響いた……

*

「たのしかったあ～」（えみりあ）
えみりあの、ルンルン気分で降りるが、他のゆーと達、悠莉達
はぐつたりしている。

「ゴーヒーカップは、あんな危険な物だつたとは……」（シズル）

「いや、HILLIAが間違ってるだけだ。絶対に。」（悠莉）

「おとうさーん！おかあーん！あれ乗りましたー！」（えみ
りあ）

「ええ！？」（悠莉、シズル）

子供に振り回される保護者（親）であった……

*

「かんらんしゃーー」（ぬみあ）

「もづ、観覧車で終わるにじよつか。」（悠莉）

「えーーーまだあそびたいーーー」（えみつあ）

「まぐわーーー」（ゆーと）

「やうやう帰らないといけないから、観覧車で最後。いい?」（悠莉）

「はーーー」（えみつあ、ゆーと）

「帰つたら、プリン作るかい。」（悠莉）

「ふりんー?たべるたべるーーー」（ゆーと）

「はやくかんりこしゃのひーーー」（えみつあ）

「現金だな……」（シズル）

*

「はーーー楽しんでくださいねーーー」（スタッフ）

観覧車が動き出す。

「わああーーー」（ぬみあ）

「たつかーいーーー」（えみつあ）

「もっとかくなるぞーーー」（ゆーと）

今、席順は保護者と子供に別れていた。

「……」（ながわ）

「うへり、うへりとある。

「うーん、ねむい……」（ゆーと）
ふああ。と欠伸をする。すると、他のルニアとニアコアも欠伸をし、四人共眠り始めた。

「疲れた……」（シズル）

「それはHニアたちも同じだろ。でも、今日は本当に楽しかったんだらうな。笑ってる。」（悠莉）
目の前の四人が、笑いながら眠っている。

「やうだな……。悠莉……」（シズル）

悠莉の方に向く。

「えつ……？つー？」（悠莉）
シズルと唇が重なる。

「……っ、……」（シズル）

「ん……、ふう……」（悠莉）
そして、ゆっくりと離れた。

「予守りが忙しくて、なかなかな。」（シズル）

「うん……」（悠莉）

「積極的だな。まあ、その方が好都合だが……」（シズル）

「好きにしても、構わない……」（悠莉）

「じゃあ、御言葉に甘えて……」（シズル）

「お疲れ様でしたーーー忘れ物がないよつて……」（スタッフ）

「……」（悠莉、シズル）

*

眠った子供達を連れ、クラシードの悠莉のマイルーム。

「まだ眠ってる。ホントに疲れたんだな……」（悠莉）
子供達をベッドに寝かせる。

「全く。大人しくしていればかわいいのに……」（シズル）
えみりあのほっぺを突つづく。

「なあ……」（悠莉）

「ん? どうした?」（シズル）

「……。今日から、一緒に寝てくれないか?」（悠莉）

「え?」（シズル）

「朝起きた時に、いつも言つんだ。お父さんはビリーハッテ……。研究に忙しいのはわかっているが……」（悠莉）

「寂しい。といつ」とか。」（シズル）

「……」「悠莉」
ヒツクリと頷く。

「わかつた。」（シズル）

「いいのか……？」（悠莉）

「ああ。」（シズル）

「ありがとう。」（悠莉）

翌朝から、六人で仲良く眠る姿が見られるようになった。

遊園地は、なんやかんやで大人が一番楽しんでいるような気がする（後書き）

「……」（シグレ、ヴァイスライド）

「あーあ、撃沈してる……」（幽真）

「まあ、今回ばかりは仕方なこやーー」（デュオ）

子供も大人も含めて、みんなの人気者。その名も……（前書き）

タイトルでわかりますよね？
誰が出るか……（^ - ^）／

子供も大人も含めて、みんなの人気者。その名も……

「ぐぬう……」（マガシ）

「おじさん」（ぬみあ）

「おじさんーあやまー！」（ゆーと）

「おじさんーたかーーー！」（えみりあ）
マガシの頭の上に乗つてる。

「……」（なぎわ）

今、かつては最強（凶）最悪と謳われたあのレンヴォルト・マガシ
が……

ユニバースで、苦戦した方々が多い……

イルミナスで、大量発生して数多のプレイヤーをイラッ とせせ……

最近では、抹殺計画にて数多のプレイヤーにレベル上げの土台にさ
れているあのレンヴォルト・マガシが……

幼稚園児×4に戯れているのである。

なぜこうなったのかは、數十分前……

*

『え? かなり忙しいのか?』 (悠莉)

ああ。今日はクラウチに寄れるかどうかわからない。すまない
…… (シズル)

『気にするな。ああ、大丈夫だ。』 (悠莉)
通信を切るが、新しい通信に入る。

『どうした?』 (悠莉)

わりい、今すっげえ人手が足んねえんだ。 (クラウチ)

『幽真たちは?』 (悠莉)

幽真、シグレ、ヴァイスライドは揃つてチョルシーの調査に引っ張られてるし、マミはグラール教団に戻つてるからな……。セイロウ、海音^{カイト}、鈴音^{リオ}、月姫^{ツバキ}、ダンにも回してるが…… (クラウチ)

『それでもキツいのか。わかつた。すぐいく。』 (悠莉)
通信を切る。

『おかあさん、おじいと~』 (えみりあ)

『うん。ごめんね……』 (悠莉)

幼稚園児×4の頭を、一人ずつちゃんと撫でる。

『御主人様! 私にお任せを!』 (ステラ)

『じゃあ、頼むわ。』（悠莉）

*

と、ステラが孤軍奮闘している所にマガシが運悪くやつてきたのである。そして、マガシを見掛けた途端に幼稚園児×4の表情が晴れやかになり、この有り様である。

「すみません、マガシ様……。ああ……エミリア様危ないです！」
(ステラ)

「なんでー？たのしいじゃん」（えみりあ）

「エミリア・パーシバル！私の頭から降りろ……！」（マガシ）

「えみりあーおじさんこめいわくだよーめつー」（ぬみあ）

身体も心も幼くなつても、ルミアはルミアであった。

「はーい……。うわあー？」（えみりあ）
マガシから降りようとしたら、足を滑らせる。

「えみりあーー」（ゆーと）

「エミリア様ーー」（ステラ）

誰もが絶望に陥った。このままでは、宙に浮いた小さな身体は重力（ここは「ロニー内のため、正確にはロニーの回転による遠心力）に従つて、地面に叩き付けられてしまつ。幼稚園児×3もステラも目を閉じた。

だが、どれだけの時間が経つても、落ちた音がしなかつた。

「ハミリア様……？」（ステラ）

「氣を付ける、エミリア・パーシバル……」（マガシ）

なんという事か。あのマガシが落ちるエニシアを受け止めたのだ。

「あっがとーーおじさんーー」(えみりあ)

「おじさんではない！－レンヴォルト・マガシだ－！」（マガシ）

「あつがとう…! がしおじれん…!」(えみりあ)

名前を言つても、結局は「おじせん」と呼ばれる。それに諦めたのか、マガシは何も言わなかつた。

*

「ただいまー。」（悠莉）

「御主人様！？あ、あの……」（ステラ）

「ん? どうした?」(悠莉)

「ふるああああああああああああ！」（えみりあ）

「ふぬああああああああああああーーー」（ゆーヒ）

「ぶるああああああああああああああ…」（るみあ）

「ぶるああああああああああああ…」（なぎれ）

「これは、一体……」（悠莉）

「はい。御主人様が仕事に行つてゐる間にマガシ様が来て、それでみんな真似を始めてしまって……」（ステラ）

「レンヴォルト・マガシイイイイイイ！」（悠莉）

覚醒済みのHP吸収のエクステ強化したホオズキを片手に、鬼の形相でマガシを探し出す。

「い、御主人様アアアアー！？」（ステラ）

マガシと悠莉の決闘は、三日も続くと予想されたが、半日で決着が付いたらしい。

なぜ半日で決着が付いたのか。それは一人の決闘を止めたのが、幼稚園児×4だからである。

子供も大人も含めて、みんなの人気者。その名も……（後書き）

幼稚園児はおじさんがお気に入りのようです（笑）

なんでもかんでも下世の遊びと言ふは良い訳ではない（前書き）

久々過れる更新……

そして、銀魂とオンドウル侍さんの仮面ライダードラゴンナイト
翼を抱いた鏡の戦士に登場するクライスが出演します（^-^）

なんでもかんでも子供の遊びと言えば良い訳ではない

「はあ…? ネグレストは犯罪だぞ…!」（クラウチ）

「つるむやーー仕事だから仕方ないだろつーH//リアたちを任せる。」
(悠莉)

事の発端は、悠莉に仕事が入ったこと。それで、悠莉は幼稚園児×4をクラウチに預けようとしているのだが、それをクラウチが拒否しているところである。

「めんどくせえんだよ。その年頃のガキは……」（クラウチ）

「お前は経験者だろ。」（悠莉）

「ステラに任せりゃ良いじゃねえか。」（クラウチ）

「荷が重すぎる。故にだ。」（悠莉）

「わかつたよ。めんどくせえけどな。」（クラウチ）

「頼むぞ。金輪際マガシに近付けさせんな。」（悠莉）

「テメツ、それが理由か…!」（クラウチ）

前回にマガシの口癖が移つた事に、悠莉は非常に腹を立てている。元々犬猿（笑）の仲である悠莉とマガシ。それが更に悪化した。

「頼むぞ。」（悠莉）

悠莉は仕事先に向かつた。

六

「たく、なんでガキ共の御守りしなきやならねえんだ……」（クラウチ）

「おひやーそーぬれぬー。」(えむつぬ)

ケーブルの足を揺すNa

「あそび=!!!(おもい)

ヒリアと同じ。

「 ちよ待て！わかつた、わかつた！！たくつ……、めんどくせえな
あ…… 」（クラウチ）

クラウチは頭を搔く。そして、適当に端末を操作する。すると、ある広告を見付けた。

『ペット探し、浮氣調査、子守り等々。何でも承ります。何でも屋、
万事屋 銀ちゃん』

(何でも屋かあ……) (クラウチ)

早速アクセスするクラウチであつた……

*

「リトルウイニングって、かなり有名な軍事会社ですよね？それが、

「なんでウチに……」（新八）

「軍事会社つつても、人手不足なんだろ。でなきや、ウチに頼まねえよ。」（銀時）

「そうアルヨ。 それぐらい理解しろよ眼鏡。」（神楽）

「なんだよ！ 僕だけバカ扱いじゃねーか！」（新八）

「騒がしいな…… って、お前らが万事屋銀ちゃん？」（クラウチ）

「おっさん誰アル？」（神楽）

「俺はクラウチ・ミュラー。お前ら三人を雇ったモンだよ。」（クラウチ）

「つーか、そんな毛むくじやらで前見えてんのか？」（銀時）

「天然パーマに言われたきやねえよ……」（クラウチ）

「ンだとテメエ！ 天然パーマ舐めてんのか！？ ああー…？」（銀時）

「銀さん！…すみません、クラウチさん……」（新八）

「まあ。これでも、非常識なお客さんは何人か見てるからな……」
（クラウチ）

「本当にすみません……。あの、依頼つてなんですか？」（新八）

「ああ、そうだ。依頼は、ガキ四人の面倒を見て欲しいことだ。ま

つ、要ある子守りだ。」（クラウチ）

「子守りかよ、めんどくせえ……」（銀さん）

「お前ら、何でも屋だろ？めんどくせえのはわかるが……」（クラウチ）

「はい。わかりましたよ、クラウチさん。」（新八）

「かーっ。ホント、坊主は礼儀正しいな……」（クラウチ）

「いえ、そんな……」（新八）

「おっさん、新八は眼鏡が本体アル。眼鏡に話しかけるプロシ。」
（神楽）

「なんであんなんだよーー！」（新八）

「とりあえず、ガキ共頼んだぞ……」（クラウチ）

*

「いーか、ガキ共の部屋は……」（銀時）

そして、万事屋三人は部屋に入った。

「誰ですか？」（クライス）

「だれー？」（幼稚園児×4）

「めっさかわいいアル…」（神楽）
「…」（新ハ）

「神楽ちゃん…？神楽ちゃんは抱き締めひやダメ…死んじゅう…」
「…」（新ハ）

「おねーさんつよーこ…」（ゆーと）

「ひー、喜んでるんだけどそのナ…」（銀時）

「締め殺す氣ですか！？」と、「何なんですかあなた方は…？」
(クライス)

「僕たちは、クラウチさんに頼まれて……」（新ハ）

「あー……。クラウチさんが言つてた追加ってあなたたちですか…」
「…」（クライス）

「あの毛むくじゃら、どんだけめんどくせえんだよ……」（銀時）

「とつあんず、お互いに頑張りましょ。ええっと……」（新ハ）

「クライスです。」（クライス）

「頑張りましょ、クライス君。」（新ハ）

「よーし、早速遊ぶアル！」（神楽）

「あんぐー」（ゆーと）

「なにしてあそぶ?」（えみりあ）

「じゃあ、ケーキがあるから……」（銀時）

「え? いきなりおやつタイムですか?」（新八）

「第一回、チキチキパイ投げ大会開始イイイイー!」（銀時）

「よつしゃああ! 始めるアル!」（神楽）

ホアチャアーーの掛け声と共に、新八に向けてケーキを投げる

「オイイイイー!! なんて遊びをするのオオオオ!!」（新八）
回避

「うるせーな。ガキの遊びと言つたらパイ投げ大会だろ?」（銀時）

「あんな危ないパイ投げ大会があるかア!! それ?」（新八）

「てやー」（えみりあ）

新八に向けてプチケーキを当てる。

「オイイイイー!! やつぱり、銀さん達の真似しちゃったよー!!」（新八）

「ちょっと、教育によく?」（クライス）

「うりやああー!」（ゆーと）

クライスの顔面に向けてモンブランを投げる。

クライス、戦闘不能。

「たのしー」（えみりあ）

「ねー」（ゆーと）

「ほれ。」（銀時）
ショートケーキをルミアの頭上から落とす。

「きやああ！」（ぬみあ）

「銀さん！—子供相手に何してるんですか！？大人げないですよー。」

！」（新八）

「新八、自分の足元見ろ……」（銀時）

「え？」（新八）
下を向ぐ。

「……」（なぎさ）

新八の足に、ショートケーキをくつつけた。

「ホアチャアー！」（神楽）

新八の顔面を蹴る。

「ぐわやああああーー！」（新八）

新八、戦闘不能。

「よくやつたアル、ナギサ！」（神楽）

「……」（なぎさ）

嬉しそうな表情になる。

そして、この大会は約一時間も続いた……

*

ちょうど、パイ投げ大会をやっていた時間、シズルの元に一つの通信が入った。

よかつた。繋がつたか……（悠莉）

「悠莉？どうしたんだ？」（シズル）

いや……。夕方位には帰れると思っていたのだが……。見誤つた
（悠莉）
……

「まだ、終わりそうにないのか？」（シズル）

ああ、だから……（悠莉）

「エミリアたちの迎えに行つてくれ。つてことか？」（シズル）

ああ。すまない、頼んでいいか？（悠莉）

「わかったよ。」（シズル）

ありがとう。なるべく早く、終わらせるから。（悠莉）

そして、通信は切れた。シズルはちょうど、野暮用でクラッド6に来ていた。

(本当に、母親として板についてきたな……) (シズル)

クラウチ幼稚園児の場所を聞いて、迎えに行く事にした。

*

「こい、だよな……」(シズル)

シズルは一気に不安になつた。子供達が遊んでいる割には、かな
り音があつかないからだ。

「H//リアたち、そろそろ時k」(シズル)

「ホアチャアアアア！」(神楽)
シズルの顔面にホールケーキをスパーキングする。

シズル、戦闘不能

「あ……」(幼稚園児×4)

「どうしたアル?」(神楽)

「お父さあああん!!」(幼稚園児×4)

「神楽アアアアアー!! 何しでかしてんだよオオオオ!!」(銀時)

「アレベラード倒れるよひじや、この子たちの親にはふさわしくないね。」(神楽)

「うつ……。なんですか……、今の悲鳴は……」（新八）

新八、復帰

「おい！！大丈夫……か……」（悠莉）
目の前の光景に睡然。

「あの、どちら様ですか？」（新八）

「お母やーんーーー」（幼稚園児×4）

「クリームだらけじゃない！何をしたの！」（悠莉）

「パイなげたいかい…………」（えみりあ）

「一体、誰が…………」（悠莉）

「……」（幼稚園児×4）

皆、銀時に指をさす。

「結構素直ですね…………」（新八）

「子供だからね…………」（クライス）
クライス、復帰

「なるほど、わかつた…………」（悠莉）
倒れているシズルを起こす。

「う……、悠莉……？」（シズル）

「大丈夫か？悪いがヒツアたちを頼む……」（悠莉）

「あ、ああ……」（シズル）

「ヤ！」のお前もだ。」（悠莉）

「あ、はい……」（クライス）

シズル、クライス、幼稚園児×4退出

「じゃあ、俺たちも……」（銀時）

「待て。お前には話がある……」（悠莉）

「あの、殺氣を感じるんですけど……。尋常じゃない殺氣を感じる
んですけど………」（銀時）

「あんなのを皿の端たりににしたば、誰でもやつなるだら……？」
(悠莉)

手をポキポキと鳴らす。

「うよつまつーーーお母さんーーー」（銀時）

「歯アくこしほれHーーー」（悠莉）

拳を振るつ

「新八ガードーーー」（銀時）

「え？ あぐああああああーーー」（新八）
直撃して、殴られた方向に吹っ飛ばされ、床に眼鏡が落ちた。

「あ……」（悠莉）

「すいみつせんでしたアアアアーーー」（銀時）
土下座。

その後、悠莉は新八に謝罪した後、張本人であるクラウチをみつ
ちりとしばいたらし……

なんでもかんでもトキの遊びと言ふべきでない（後書き）

「ああく者アアアア……コララボキャラに向じでかしてるのオオオオ
……」（幽真）

「オンドウル侍さん、作者は俺たちが責任を持つてボコすね」（デュオ）

「ホントにすみませんでした……」（作者）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4809w/>

リトルウイングの非日常

2011年12月1日16時51分発行